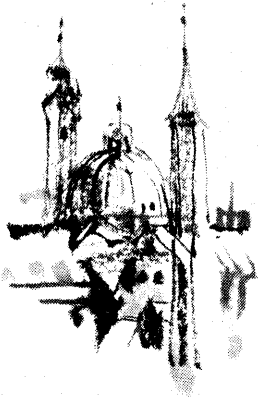


---

---

# 思い出すままに

石島 襄 二



---

仕事の関係上、六五年の初夏から七二年の春にかけてイギリス(ロンドン)、アメリカ(ニューヨーク)、インド(ニューデリー)の三ヶ国を、家族と共に「放浪」して来ました。ごくありふれた駐在員暮しで特に目新しい話題もありませんが、ロンドン入りした時長男が四歳でした。アメリカで生まれた長女はインドで三歳を迎えたため、子どもたちがそれぞれ異なる国々で幼児教育を受けた点が、多少変わった経緯といえるかもしれません。

悲しいエコノミック・アニマルのさがで、仕事に追われあまり子どもにかまけてもいられませんでしたし、記憶の薄れた部分もありますが、家内と「こんなこともあったっけ」、「あんなこともありましたね」と話し合いながらメモしてみた思い出話をご紹介します。

## ☆ ロンドンの小学校

海外駐在員の常として半年前に先発した私が、家内と息子をロンドン郊外のヒースロー空港に迎えたのは、もうすっかり日足が短くなり、街燈の灯が名物の霧ににじんで見える秋のことでした。ヘソの緒切って以来初めて乗る飛行機が、いきなり北極圏回りのジェットとあって、緊張のあ

まり機内で食事もロクロクのどに通らなかつた家内と息子は、あこがれのイギリスの地を踏んだというのに顔面蒼白、疲れ切つて到着後二、三日は見物どころかまくらも上がらない状態でした。

しかし寝てばかりもいられません。まず息子の幼稚園探しにかかりました。私どもが居を構えたのはロンドン南郊のテニスで有名なウインブルドンにほど近い住宅地域でした。といっても左隣りは警官。右隣りは年金暮しのおばあさんといったあんばいで典型的な庶民の町。四歳八ヶ月の息子は近所の小学校に通うことになりました。その年の四月に上北沢の松沢幼稚園に入園したばかりの息子が、なぜイギリスで小学校に入学することになったかというそれには次のような事情があります。

イギリスでは最初の義務教育、つまり小学校は五歳からとなつていますが、二歳から五歳までの幼児には私立のナーセリー・スクール(幼稚園)があります。ナーセリーには幼児が「モーション(大便)」を自分で訴えることができるようになれば二歳からでも入園できますが、月謝は最低でも八ポンド(当時の八千円)と決して安くありません。八年前イギリス家庭の約四〇%を占める中堅層の月収が一〇〇ポ

ンド(同十万円)から一五〇ポンド(同十五万円)でしたから、一般家庭にとって子どもをナーセリーにやるにはひと思案といった訳です。

そうした親の悩みを反映してか、一応五歳からという建前になっている小学校に四歳からでも入学できる仕組みになっていきます。公立の小学校はいっさい無料ですから家計の苦しい家庭にとってはこれは大きな福音といえましょう。もっとも洋の東西を問わず、無理をしてでも子どもをよい学校にやりたいという親心は同じです。隣の警官も子どもを名の通つたナーセリーに入れたい一心から、まだベビーが母親のお腹にいる間に某有名ナーセリーに予約していたのには驚かされました。試験が無く申し込み順のイギリスでは別に珍しいことでもなかつたようですが……。

一方、も寄りのナーセリーが満員だったことは、貧乏駐在員の私にとって息子を公立小学校に入学させる絶好の口実を与えてくれました。学校の名前はウインブルドン・パーク・インファント・スクール。ロンドン入りし十日目には手続きを終わって入学することとなり、当日午前八時指定通りのイトトン・キャップと制服(お国柄でレインコートも含まれています)に身を固めた息子の晴れ姿に、両親は大満

悦で付き添って行きました。

ところが、チンプンカンプンの言葉を話す青い目の子どもたちの中にひとり残されることとなった息子はがぜん心細くなったと見え、さめざめと泣き出しました。両親の方も去るにしのびないので、長身金髪、典型的イギリス美人（これは家内も異議なく認めたところですが）の担任のキヤプラン先生は「親がいたのでは子どもがいつまでも依頼心を無くしません。言葉の障害があっても心配ありません」と断固たる態度。後に心を残しながら私共は学校を後にしました。何しろ第一日から下校時間は午後三時十五分、家内は時計とにらめっこで一日いても立ってもいられなかつたようですが、校門が開いて姿を現わした息子は、意外にも朝と打って変わったニコニコ顔でした。なんでも先生以下二人の女性の助手がつきつきりで面倒をみてくれたとのこと、どうやら息子は先生に一目ぼれして、ついでに学校も好きになってしまったようでした。

授業を参観できなかったのようすはよくわかりませんが、一年生の段階では教科書類はほとんど使用せず、アルファベットの手ほどき程度でやはり幼稚園の延長といった印象でした。非常に有難かったのは、給食時のテーブル・

マナーをしつけてくれたことでした。それまで過保護で一人ではろくろく食事もできなかった息子が、スープの吸い方から、ナイフ、フォークの使い方まで覚えてしまったのです。イギリスの社会で学校と関連して強く印象に残ったことは、大人と子どもの生活を全く切り離して考えているとでした。学校でフルコースともいえる内容豊富な食事をとって来た子どもたちには、夕方五時半になるとハイティーンと称するお茶とかなりボリ、ユームのあるサンドイッチ程度の食事を与え、七時を過ぎると有無をいわさずベッドルームに追いやり外からかぎをかけてしまいます。その後大人たちは子どもに気がねなく、夜の時間を食事や社交などにあてるのです。

#### ☆ ニューヨークの幼稚園へ

滞英一年余りでニューヨークに転勤となり、開通早々のJAL大西洋便で家族ともども海を越えました。緑の豊かなロンドンに比べると、ニューヨークはあまりにもほろりっぱく、ガサガサした感じでした。緑を求めた私どもはハドソン河越しにマンハッタンの摩天楼群を望むニュージャージー州のブルーバート・イーストにアパートを見つけまし

た。息子は今度は近くのロバート・フルトン・パブリック・スクールの付属キンダーガーデン(無料)に入園することとなりました。

アメリカの幼稚園はイギリスのそれと全く対照的でした。まず息子の服装が一変しました。マーク入りのブレザーに半ズボン、黒の短靴に膝までのストッキングというかしてまった服装が、ジャンパーにジーンズ、白のソックスにバスケット・シューズというくだけたスタイルとなったのです。みかけはいっぱしのヤンキー・ボーイになったものの、息子はなんとかしゃべれるようになったばかりのロンドンの下町言葉「カクニー」から、急にアメリカ英語へと変わったので面くらったようでした。最初の二ヵ月間、息子は学校へ行ってもイエス、ノー以外あまり口をきかなかったのです。やがて先生(今度はミセス・コーリンという)めがねをかけた陽気な典型的なヤンキーおばさんでした)から親に呼び出しがかり、「あなたの息子はオシじやないでしょうね」と冗談めかした質問をされたほどです。しかしそれから間もないある日、息子は突然アメリカ英語をベラベラしゃべり出しました。息子の頭脳をコップにたとえますと、毎日学校で少しづつたまっていつ

たアメリカ英語がやがていっぱいになり、一挙に溢れ出たという感じでした。ただし、十歳未満の子どもの頭脳には記憶の引き出しが少ないのでしょう。だからこれで引き出しにはいついたものを捨てないと新しいものが納まらないらしく、もうHを発音しないカクニーの影も残っていませんでした。これは六九年にいったん帰国した時間も同じで、一週間テレビの前にすわりっぱなしで日本語の新知識を吸収し終わったら、折角流暢になったアメリカ英語もみるみる忘れていつてしまいました。

登校後は表門にかぎをおろしてしまうので、いうなれば子どもを朝から午後遅くまで丸抱えにしてみらった形のイギリスのインファント・スクールに比べ、昼食時、児童を家に帰すアメリカの幼稚園では、両親に对しかなり細かい要求が遠慮なくぶつけられて来ました。特にうるさかったのは散髪と清潔な服装で、着る物には上から下まで必ずアイロンを掛けて来るよういわれました。虫歯の治療も徹底的に行なうよう求められ、治療費が高いので往生しました。その他少しでも問題があるとすぐに親に呼び出しがかりました。

また男児には幼稚園時代からレディー・ファーストの観

念が厳しくたたき込まれ、女兒に対し少しでも粗暴な振舞があると言任の所在に関係なく、男児側にピシピシ体罰(おしりをたたく)が加えられたのは、いかにもアメリカ的でした。

私どもは別に人種的偏見をいだいていませんでしたが、ロバートフルトン校には黒人児童がひとりも在校しておらず、白人の親たちは内心それを誇りとしているようでした。何人かいた日系人の子どもは例外的有色人種でしたが、概して成績優秀なので問題なく受け入れられています。これは息子が小学校に進んでから知ったのですが、一学年三組のクラスを能力別でABCのグループに分け、一種の英才教育をやっていたのは驚きました。社会の階層化が古來定着しているイギリスならいざ知らず、「自由の女神」像をハドソン下流に臨むアメリカの一面でのことだけに、やや意外な感があったのです。

しかし、それ以上に興味深かったのは子どもを最低グループに入れられた親たちがきわめてノンビリしていたことでした。こんな時日本の母親がどんな反応を示すであろうかは想像に難くありませんが、アメリカのママには危機感が希薄なのか、やたらにあわてないのか、子どもを塾(そ

んなもは存在していませんでした)にやったり、家庭教師につけたりするようすはさらさらありませんでした。そうした親の態度を反映しているのでしょうか、アメリカの子どもたちが底抜けに明るくノビノビ育っていることが印象に残りました。

アメリカで最上グループに属し、秀才の誉れが高かった息子が、日本に帰ったらただの平均的児童に過ぎないことが判明し、改めて日本の水準の高さに驚いたり、がっかりしたことを、蛇足ながらご報告しておきます。

(OECDパブリケーションズ・センター)

